

平成24年度 教師海外研修 研修報告書

派遣国：タンザニア

学校名：川崎市立西高津中学校

担当：社会科、総合的な学習の時間担当者

氏名：戸沼 雄介

1. 今回の研修における目的やねらい

開発教育については以前より興味を持っていたが、実際にどのように年間計画の中に位置づけるのか、また、どのような手法で教材づくりをすすめるのか、など、わからないことがたくさんあった。現在、私は総合的な学習の時間の責任者として、単元づくりをすすめる立場にある。今回、海外教師研修があるということを知り、JICAの進める開発教育支援事業の枠組みを使って、これらの課題に対して答えを探していきたいと考えた。

また、このような研修は、社会科の公民的分野の授業にも活きると考えた。公民的分野の指導要領のなかに「持続可能な社会の形成」というキーワードが見られるが、そのためにも、まずは現在の世界の抱える課題を伝え、その課題に対して向き合って行動できる子どもを育てていく必要があると考えている。そして、自分自身もそのように在りたいと思っている。

以上のようなことから、今回の教師海外研修に応募した。

2. 目的やねらいがどのくらい達成されたか

事前研修等でも授業づくりの部分については、神奈川開発教育センターの講師の方などを交えながら着実に研鑽を積むことができた。また、タンザニアにおけるJICA事業を視察したり、現地の方とのコミュニケーションを図る中で、想像をはるかに越える発見や気づき、驚きがあった。これからその成果を整理して授業づくりを進めていく必要があるが、当初の目的やねらいは十分に達成できたのではないかと考えている。

3. タンザニアから学んだこと

第一に、タンザニアで暮らす人々の力強さである。私たちが日本人であると知るとどんどん実門をぶつけてきた各学校の生徒たちや教職員の方々、村に道路を誘致しようとして必死になり必要性を訴えたり努力の成果を見せたりしてきた人々など、この研修で多くの方々に出会い、それぞれの場面で本当に一生懸命な気持ちを感じた。

第二に、タンザニアで暮らす人々のおおらかさである。この部分に関しては、我々日本人とも似ているところを感じたが、例えば異なる部族の人々が「スワヒリ語」を使ってコミュニケーションを図ることにより、お互いの違いを乗り越えていくようすなどを見て、とても素晴らしいことであると感じた。

4. 今回の研修経験をどのように教育活動に活用しようと思っているか

現在、さまざまな場面で「持続可能」というキーワードが聞かれる。また、「協同」という言葉もあらゆる場面で耳にする。今回の研修で学んだことは、まさにこの2つのキーワードの持つ意味そのものであると感じる。まずは子どもたちに私たちの住む社会のようすを伝え、どのようにすればさまざまな課題をみんなで乗り越えていけるのかを考えていきたい。また、グローバル化した社会では、距離が離れていても、お互いが手を取りあい支え合うことができるのだ、ということも示していきたいと考えている。

5. 今回の研修に参加してよかったことや、よりよくするための提案

今回の研修では「教育」「インフラ」「生活（水）」という3つの大きな柱が立っており、当初はやや欲張りなのではないか、絞ったほうがよいのではないかと、というようなことも感じていたのだが、3つの分野でのJICAのさまざまな取組を総合的に見ることができ、私のなかでも考えが深まった部分が多い。例えば、「インフラ」に関する分野である。日本にいればなかなか考えることもなかった道路などの「インフラ」問題であるが、タンザニアでは人々の暮らしに直結する身近なものであるということがよくわかった。専門家の方のご意見をいろいろな場面で伺えたのも、大変勉強になった。

逆に言えば、「時間が許せばもう少し見たい」「もっと考えたい」と感じる場面もいくつかあったのは事実である。しかし、参加したすべての方々がそれなりの想いを持ち、この研修に向かってきているなかで、すべてのことをするのは現実的にも難しく、各々で工夫をしながら乗り越えていかなければいけない部分もあるのでは、と思う。私の場合は、濃密な研修であるからこそ沸き起こるさまざまな派生的疑問や想いについて、JICA事業に携わる専門家やJICA職員の方々、青年海外協力隊の皆さんとの会話で補完することもできた。また、JICA事務所の方々も臨機応変にさまざまな対応をしてくださり、本当に有り難かった。

6. その他、研修全般を通じての感想・意見など

前述の内容とも関連するが、今回はJICAの方々がよく議論を重ねてくださったおかげで、移動に割く時間をかなり短縮することができ、広いタンザニアのなかで滞在した場所は限られてしまったが、その分、その地域について深く知ることができた。限られた時間の中で、ねらいを明確にできたことがとても良かったのではないかと感じる。

このような素晴らしい機会を与えてくださった方や、研修中のさまざまな場面で活動に協力してくださり、サポートしてくれた青年海外協力隊のイリング隊員の皆さまに本当に感謝している。

7. 今後の本研修参加者へのアドバイスなど

貴重な機会であることは間違いないので、その機会を有効に活用するためにも、自分自身のねらいや取り組みたいことなどを事前にはっきりとさせておくことがとても大切であると思う。また、参加者の方々とコミュニケーションを図り、チームでさまざまな課題を共有して取り組むことで、より実りのある研修とすることができると感じた。

8. 各訪問先等の所感

日時	テーマ	所感
7月29日(日)	日本からタンザニアまでの移動中および現地到着	タンザニアの一番大きな町・ダルエスサラームに降り立ち、大きなビルや整備された街並みに驚いた。成長大陸・アフリカを感じる場面であった。ところどころに古い建造物がのこっているが、タンザニアの交通が日本と同じ左側通行ということもあり、日本との差を感じる場面はあまりなかった。所々に見える大きな宣伝看板の内容が、異国の地へきた証拠のように見えた。

提出期限：平成24年8月16日（木）

7月30日（月）	JICA タンザニア事務所表敬	JICA タンザニア事務所所長の勝田さんより、経済発展とともに「国内格差」が広がってきた（電化率15%、農業に従事する人の多さ、等）という話をいただいた。ダルエスサラームの発展のようすばかりに目が向いていたため、「国内格差」という今回の研修での一つのテーマができた。今後のJICA 事業の視察において、その事業の背景をしっかりと見たり感じたりしてこすることで、タンザニアという国をより深く理解できるのではないかと考えた。
7月30日（月）	本日の振り返り	JICA タンザニア事務所の皆さんと夕食をともにしながら懇談できた。道路セクター担当の丸尾さんより、タンザニアの道路事情や、道路が果たす役割、内陸国との関係などの話を伺い、日本にはなかなか馴染みのない（考えたことのない）「道路」という問題について、考えるきっかけを与えてもらった。
7月31日（火）	JICA タンザニア事務所研修ブリーフィング	教育、道路、水の各セクターの担当者の方より JICA 事業の概要とこれからの課題について伺い、開発支援の重要性を知ることができたが、同時に支援の難しさも感じた。自助努力を促していくことと、そのための技術を支援することの両面を大切に取組んでいることがわかった。
7月31日（火）	市内視察（教材購入）	ローカルな食堂で初めてウガリを食べたが、想像していたものとは違い、かなり淡泊な味であることに驚いた。また、一食100円～150円程度の代金でボリュームの多い食事がとれたことも、農業が豊かなこの国ならではの特徴のように思えた。教材購入で訪れた POSTA で、絵葉書や切手、マリンバという楽器を購入したが、そのときに購入した商品の説明や値段についてスワヒリ語を使用してたくさん会話をした。（結果的に値引きもしてもらった。）こちらがコミュニケーションをとることで、相手も楽しそうにしてくれることがとても嬉しかった。
7月31日（火）	本日の振り返り	「一番印象的なことは」「一番の疑問は」という題で話し合いを行なった。参加者の皆さんの意見から、街中のさまざまな「音」のことや、ネットなどの情報社会の普及でタンザニアはどのように変わったのだろう、などの意見が出されて、話し合うことで興味を広げることができた。

提出期限：平成24年8月16日（木）

8月1日(水)	ミクミ国立公園、タンザム幹線道路改修計画	国立公園の真ん中を幹線道路が通過しているということに、タンザニアらしさを感じた。目の前で動物がのびのびと暮らしている様子を見て、自然あふれるタンザニアの重要な資源となっていることを感じた。昼食場所では遊んでいる子どもたちとコミュニケーションを取り、一緒に写真を撮ることができた。積極的な会話をすることが大事であると感じた。
8月1日(水)	イリング隊員との懇談	隊員の皆さんとさまざまな話ができ、とても有意義であった。任地で直面している苦労もたくさんある一方で、たくさんの方がやりがいも感じてい様子がどこか楽しげであった。JOCVの仕事について興味を増すことができた。
8月1日(水)	本日の振り返り	イリングとダルエスサラームの町のように違っており、参加者でその違いから感じたことを共有することができた。また、翌日より始まる教育セクター部門での打ち合わせを行い、情報が錯綜していた頭の中を整理することができた。
8月2日(木)	クレルー教員養成学校 横山隊員	熱心な学生さんが一生懸命に学習に取り組む姿をみさせてもらった。学生さんの志は高く、隊員の方の授業のようすからも、「PC技術を取得しよう」とする学生さんの熱心さが伝わった。多くの学生さんが「教師になることで、多くの人を救うことができるから」と言っていたことが深く印象に残った。日本という国に対する関心も非常に強く、「日本に連れていってくれ」「日本のように発展するにはどうすればいいのか」などの質問を受けた。日本に住んでいて、日本という国についてあまり深く考えたことがなかったので、答えに詰まってしまった。
8月2日(木)	イフンダ中等学校 幾山隊員	同僚の英語の先生とともに、原爆に関する授業を行なった。事前の打ち合わせで、「日本の原子爆弾被害について興味を持っている」という報告を隊員の方より受けており、授業の計画を練ってきたのだが、「日本はなぜ、今、アメリカと仲が良いのか」という質問がきたときに、中等学校の学生のレベルの高さを感じた。同時に、明日訪れる公立のローカル小学校に興味を持った。教員の方との交流も持つことができた。タンザニアにきて、イスラームとクリスチャンが共存をしている姿を「すごいなあ」と感じていたので、直接疑問をぶ

提出期限：平成24年8月16日（木）

		つけてみた。ニエレレ大統領が120の部族をまとめていたことやスワヒリ語という言葉の存在、そしてまずは「和」を大切に考えるということをお願い、タンザニアの人々の心のなかにあるものと、日本人の共通点を見つけられたような気がした。
8月2日(木)	本日の振り返り	年間のタンザニアの学校の学費について、隊員の方から聞いた情報と考えたことを発言した。我々にとってはさほど高い金額ではないが、タンザニアではとても大きな額となることに、率直に驚いた。また、翌日のンゴメ小学校の交流授業に関する打ち合わせを行い、必要な準備等を確認することができた。
8月3日(金)	ンゴメ小学校 谷村隊員	子どもたちが、出迎えて歓迎をしてくれたことにまずはびっくりした。行事に向けてマサイの格好を準備しているところに偶然出くわしてしまい、その少年が「ああ…みられちゃった…」という表情をしていたので、懸命に我々を出迎えてくれようとしている、その純粋な気持ちに感動した。実際の歓迎セレモニーでは、ダンスや歌などで4年生と7年生が出迎えてくれ、とても感慨深いものであったが、校長先生の式典のあいさつのときにまだ厳然とあるタンザニアの教育問題を再認識することができた。（校長先生は教室数や教員数の不足、学校の環境等についてスピーチをしていた。）交流授業では、日本のさまざまな文化の紹介とゲームなどをして過ごしたが、本当にあつという間の50分であった。子どもたちは目をキラキラさせて参加してくれた。自分の名前を楽しそうに伝えてくれて、本当にうれしかった。日本の中学生が手紙を書いたので最後に手渡した。皆、一生懸命に読んでくれていたので、頑張っってスワヒリ語で手紙を書いた甲斐があったと感じた。
8月3日(金)	コミュニティ訪問	地方の議員さん同乗のもと、道路や診療所、水くみ場等を見学させてもらった。タンザニアの方々が、自分たちの住む環境に対してしっかりと努力し、改善を試みている姿が見られ、感心した。
8月3日(金)	Mkwawa 博物館	タンザニアの方々が、部族をととても大切にしており、また誇りを持っていると感じた。部族社会というのはタンザニアの一つの特徴なのかもしれないと考えた。

提出期限：平成24年8月16日（木）

8月3日(金)	本日の振り返り	今日感じたことに加えて、JICAの隊員さんが、地域コミュニティに入り込み、地域と一体となって活動に取り組んでいる様子などを皆で共有することができた。タンザニア事務所の足立さんより、「タンザニアで出会った“人”を伝えて欲しい」というようなメッセージをいただき、アンケートの調査などに積極的に取り組むなどの今後の課題も整理することができた。
8月4日(土)	地方道路開発技術向上プロジェクト視察	道路整備プロジェクト候補地のマグリルワ村を訪れて、はじめて道路が「身近にある問題」というのを感じた。道路などのインフラにより、国内の格差がうまれてくるということが、住民の皆さんのお話から良くわかった。マーケットのようすなども、今までに見てきた町のようすとは全く異なっており、また、子どもたちが家事の手伝いをしているようすもいたるところで見られ、タンザニアの抱える問題の深さを感じた。地方の村の学校のようすも、ぜひ見たいと感じた。
8月4日(土)	イリング市内視察	昨日に続き、隊員さんとイリング市内のマーケットを中心に歩いた。教材となりうる商品を見つけ、購入することができた。イリングの町について隊員さんと話しながら回らせてもらい、イリングに愛着がわいた。素晴らしい夕陽も鑑賞することができた。4日間、本当にお世話になったイリング隊員の皆さんに感謝したい。
8月4日(金)	専門家との懇談	道路事業の専門家の方と食事をしながら懇談し、昼間に感じたことなどを率直に話すことができた。改めて、「支援する」ということは、結果だけでなく、過程も大切であるのだと知った。
8月5日(日)	イリングからダルエスサラームへの移動	イリングを離れることに、さみしさを覚えた。アフリカのバオバブの木を間近で見て、生命力の強さに神々しい雰囲気を感じた。
8月5日(日)	本日の振り返り	「国内格差」ということを改めて感じる振り返りとなった。参加者の方が行なったインタビューより、地方の村で「ここにいたら幸せにはならない」「この村を助けてくれるのか」という言葉が聞かれたとの報告があり、援助することの難しさを実感した。同時に、これから帰国してから、各々がこのことを生かしてどのような授業をしていくべきか、皆で深く考えることができた。

提出期限：平成24年8月16日（木）

8月6日(月)	首都圏周辺地域給水計画視察	ダルエスサラームよりフェリーで向かった村の給水施設を視察した。現地の方々の努力で、しっかりと維持管理されており、それが大切なことなのだろうと感じた。地方の村の学校のような垣間見ることができた。国内随一の都市に近いこの村であるが、机の数やトイレの設備などは十分ではなく、街中の学校との「差」を感じてしまった。水資源が非常に少ないというタボラ州に興味を抱いた。
8月6日(月)	JICA タンザニア事務所 討論会	「タンザニアの国内格差」というタイトルの下、さまざまな視点から率直に意見を交換することができて、とても有意義であった。「私に何ができるのか」という質問で、改めて今後の自分自身の責任の重さを感じた。まずは子どもたちにしっかりと伝えていきたい。
8月6日(月)	教材購入	ティンガティンガ村で、タンザニア隊員さんが開発に携わったというバオバブ石鱈を購入することができた。
8月6日(火)	本日の振り返り	帰国後の事後研修に向けて、参加者の皆さんで必要なことを確認することができた。
8月7日(水)	JICA タンザニア事務所 研修報告会	タンザニア事務所の勝田所長より、「“不便”と“不幸”は同じではない」という印象的な言葉をいただいた。違いばかりではなく、同じ人間として、似ている部分もたくさんあった。タンザニアと日本のつながりについて、帰国後も考えてみたいと感じた。タンザニアの人と一緒に、これからも生きていきたい。
8月7日(水)	在タンザニア日本大使館表敬訪問	岡田大使より、タンザニアの様々な分野での実情をくわしく教えていただいた。「地方分権」という一つのテーマが浮かび上がり、興味深く話を伺うことができた。
8月8日(木)	タンザニアから日本までの移動中および日本到着	マーケットではあまり目にすることがなかった「タンザナイト」や「金」などの装飾品が空港の免税店で売られている様子を見た。飛行機内では今後の授業について参加者と意見を交換しながら過ごした。